

第一部 やがて、ビブリオバトルがはじまる

ビブリオバトルって知ってる？

自分の好きな本を紹介しあうゲームなの。

最後に、一番読みたくなった本「チャンプ本」を決めるのよ。

とってもおもしろいんだから！

——^{たん}壇くるみ 図書館司書

アナウンサーになりたい

— 海野珊瑚の場合

森川成美



「はい、四票で、ごつち、じゃなかった、海野珊瑚さんの『朝びらき丸 東の海へ』がチャンプ本になりました」

班長のトリムーがいった。あ、トリムーは本当は鳥越むつみっていう名前前で、鳥越の「鳥」とむつみの「む」を合わせて「トリムー」という。あたしがつけた。

あたしは人のニックネームをつけるのが好き。先生は、ニックネームを人の体の見た目とかでつけちゃいけないっていう。もちろん、そんな人を傷つけるようなつけ方は、あたしはぜつたいしない。いつも、みんなに、すぐユニークでセンスがいいってよろこばれている。トリムーも自分のニックネームを気にいってるし。鳥越さんって呼ばれるより、ずっとうれいって。あたしも、もちろん「ごつち」って呼ばれる方がうれい。「珊瑚ちゃん」より距離が近くなる感じがするじゃない？

ともあれ、今はニックネームの話をしてるんじゃない。今、ここ四年二組で班ごとにビブリオバトルをやっていたのだけれど、そのチャンプ本に、あたしの紹介した本がなった、という話だ。

「やった！」

あたしは、思わずガッツポーズをした。

「おめでとう！」

トリムーは立ちあがると、あたしの手をにぎって、大きく上下にふった。

「ありがとう！」

あたしも立ちあがってにぎりかえたところで、正面の「キンコ」こと小川セイラが、半目でにらんでいるのに気がついた。キンコ、なんで怒ってるのかなと思つたとき、いつもおとなしいキンコが、しぼりだすような声でさけんだので、びつくりした。

「そんなの、うそのチャンプ本よ！」

え？ あたしにいつてるの？
 どういうこと？

あたしは目が点になった。

ビブリオバトルのチャンプ本は、紹介された本がなるもので、本を紹介したバトラーのものじゃない。それは知ってる。先週の授業で、ここ、並木小学校のとなりにある並木図書館の司書の「クルミン」こと壇くるみさんが来て、説明してた。

クルミンはそのとき、この四年二組の担任、鈴木太郎先生とふたりでビブリオバトルをした。クラスみんなにビブリオバトルはどうやってやるのかを、説明するためだ。

クルミンが紹介したのは『からすのパンやさん』という、みんながよく知っている絵本だった。これに対して先生が紹介したのは、同じく鳥が主人公の絵本でも『よだかの星』という、これもみんながよく知っている宮沢賢治の童話だった。で、みんなで手をあげたところ『からすのパンやさん』がチャンプ本になった。

先生はとつてもがっかりしていたけれど、それは先生が悪かったのではなく、ただ『よだかの星』がかわいそうなお話で、『からすのパンやさん』が楽しいお話だったからだろうと、あたしは思う。

要するに、ビブリオバトルは、チャンピオンを選ぶものじゃない。選ばれるのは本だ。だからあたしが腹を立てるのは変かもしれないが、でも、あたしはキンコの「うそのチャンプ本」という言葉を聞きながすことはできなかった。

「なんでうそのチャンプ本なのよ」

あたしは、キンコにいいかえしていた。

「だって、原稿作つたでしょ」

キンコは、あたしの手もとにあるメモを指さした。

「ビブリオバトルは、原稿作つたらいけないのよ。先週の授業でそう教わつたでしょ」

たしかに、クルミンはそんなことをいつてた。

あたしもそれはわかってた。でも、あたしには、原稿げんこうを作って練習したいわけがあったのだ。それにあたしは原稿げんこうを読んだわけじゃない。おぼえてしゃべったのだ。このメモは思いだせないときのために作っただけだし、実際じっさいには見なかった。「原稿げんこうを読んじやいけないっていうのは聞いたけど、それは原稿げんこうを読むとかたくなっちゃって本のよぎが伝わらないからだって、クルミンがいつてたじやない。だったら、おぼえて、かたくならないでしゃべるんだったら、別に悪くないんじゃないの？」

あたしは、キンコに反論はんろんしていた。

「そお？　だめっていうんだから、だめなんじやないの？」

キンコはいつになく、いいはる。こんな子だったっけ？　ちよつとびっくりする。おとなしくて、いつも下向いて本読んてる感じだけ。

そもそもあたしが、小川セイラにキンコってニックネームをつけたのは、この子が本を読みながら歩いていて、壁かべにぶつかったのを見てびっくりしたからだ。

